

## 病院小児病棟における保母職の導入：第2報 病棟内保母の業務内容の検討

著者	窪田 英夫, 鈴木 裕子
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	36
ページ	81-87
発行年	1996
出版者	東京家政大学
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1653/00008941/">http://id.nii.ac.jp/1653/00008941/</a>

# 病院小児病棟における保母職の導入 第2報 病棟内保母の業務内容の検討

窪田英夫・鈴木裕子  
(平成7年9月30日受理)

## A Study of Introduction to Care Taker Nurse for Pediatric Wards in Hospitals (2) Various Activities of Care Taker Nurses

Hideo KUBOTA and Yuko SUZUKI

(Received September 30, 1995)

### 1. はじめに

長・短期を問わず、入院中の子どもに対して看護以外の援助が子どもの精神・心理的な改善、ひいては病状の回復に役立つことは一般に認められているところであり、そうした前提の中で保母職、心理職、その他を小児科病棟に導入することの必要性が検討されつつある。しかし、日本の医療費体系の中ではそうした職種の導入は認められておらず、個々の病院の経営努力の中でそれらの問題が実施されている状況にある。我々はこうした視点の中で保母職の導入が実態としてどのような状況にあり、しかも、その効果がどのような面で具体的にあげられているかを実証したいと考えた。第1報においては、まず小児科を標榜する全国の病院3792病院に調査を行い、保母を導入している病院数および小児科病棟、小児外科病棟、小児総合医療施設(小児病院)に勤務する保母数を把握し、更に他の職種との関係、今後の導入に対する考え方など、きわめて貴重な結果を得ることができ報告した。しかし、前回の調査ではそれら保母の病院内での活動状況、勤務形態、入院児との関係など、実態的内容まで調査することができていなかったところから、今回は、保母を勤務させている病院並びにその病院に勤務する保母に対して上記の内容を分析し得る調査票を送り、それらの回答の内容から、病院内勤務保母の活動状況を概ね把握しえたと考えている。そこで本報では、それらの調査結果につき報告したい。

### 2. 方法

全国の医療機関を対象に実施した前回の調査結果の中  
小児医学第一研究室・保育学研究室

で、既に保母を導入している医療機関123施設を対象に、そこに勤務する保母に調査票を送付し回答を求めた。調査期間は平成6年11月より12月初旬とした。

調査票は下記の内容により構成されている。

- 1 病院の構成
- 2 保育教材・玩具・遊具の種類
- 3 図書・雑誌の所蔵
- 4 病棟内の装飾
- 5 定例行事
- 6 保育目標
- 7 病状に応じた保育の実際
- 8 保育の記録と評価
- 9 家族との関わり
- 10 申し送りとカンファレンス
- 11 保母業務と看護業務
- 12 保母の勤務条件
- 13 入院児のQOLの向上にむけた保母職の役割
- 14 チーム医療からみた保母職

調査票は90施設から回答が得られ、回収率は73.2%であった。

表1 保母職が勤務している医療機関

医療機関	施設数(%)
大学付属病院	26 (28.9)
国公立病院	15 (16.7)
小児総合医療施設(国公立)	11 (12.2)
その他の小児病院	4 (4.4)
医療法人等総合病院	33 (36.7)
診療所	1 (1.1)

回答の得られた医療機関の内訳は表1に示すとうりであるが、保母は大学付属病院、医療法人等総合施設に勤務しているものが多かった。

### 3. 調査結果

#### 1) 保母導入の現状

施設における病棟保母配置の現状は表2に示すとうりである。

保母の導入は小児科と他科の子どもとの混合病棟に多く、

表2 常勤保母の導入状況

項 目		施設数 (%)
勤 務 病 棟	小児科だけの病棟	26 (28.9)
	小児の混合病棟	32 (35.6)
	小児・成人の混合病棟	23 (25.6)
	小児外科だけの病棟	3 ( 3.3)
	新生児病棟 (NICU を含む)	10 (11.1)
	小児総合医療施設	9 (10.0)
保 母 数	1人	33 (39.3)
	2人	16 (19.1)
	3人	12 (14.3)
	4人	13 (15.5)
	5人	3 ( 3.6)
	6人	1 ( 1.2)
	7人	1 ( 1.2)
	8人	1 ( 1.2)
	9人	1 ( 1.2)
	10人	2 ( 2.4)
	11人以上	1 ( 1.2)
保 母 職 の 導 入 年 数	1年	2 ( 2.7)
	2年	2 ( 2.7)
	3年	2 ( 2.7)
	4年	3 ( 4.0)
	5年	1 ( 1.3)
	6年	6 ( 8.0)
	7年	1 ( 1.3)
	8年	4 ( 5.3)
	9年	2 ( 2.7)
	10年	6 ( 8.0)
	11年以上	46 (61.3)

小児科と成人の混合病棟でも25.6%に見られる。一方、小児科のみの病棟では28.9%である。また、新生児病棟に保母の勤務が認められるのも特徴的である。

次いで、保母の配置数を見ると一人が多く、平均配置数では2.7人になるものの施設による差が大きいことを示している。

更に、保母の導入年数では、11年以上の施設が61.3%と多く、6年、10年が、次いで多い。このことは、保母職の実績が評価された結果と言えよう。

#### 2) 病棟の保育環境

入院児の保育環境としての施設、設備に関しては前報でも報告し、プレイルーム設置の多いことが明らかになっている。今回は、保育を展開するために必要な保育教材・遊具の充実度及び書籍類の保有状況について検討した。その結果が表3である。

遊具に比べて教材の充実している施設の多いことがうかがえる。また、図書類の保有数は施設により差があるものの、全体の傾向としては充実しているといえよう。

次に、病棟が生活の場であることを配慮した雰囲気作りの一助として子どもの心を和ませる室内装飾等は86施設 (95.6%) で装飾を行っていた。その交換頻度は表4に示すとうりである。

月各や季節感に配慮している様子がうかがえる。但し装飾は保母だけで行うといった施設の多いこと (74.4%) が特徴的であった。

更に、入院児であっても可能な範囲で生活経験を豊かにすることや、生活の単調さからの解放を意図した入院中の行事の実施についてみると、行事を企画し実施している施設は85施設 (94.4%) であった。その内容は表5に示すとうりである。

平均的には1.2回の月例行事と6.5回の年間行事が実施されている。

また、行事への参加は表6に示すとうりである。

病棟内スタッフ、家族のいずれも、行事によっては参加をしている状況が多い。

#### 3) 保育の実際

病棟内の保育における保育目標の立案は63施設 (70.0%) で行っている。立案されている目標の種類は表7のとうりである。

年間目標を立てている施設が多く、その他はあまり差

は見られない。

併せて、個別に援助を必要とする子どもたちに対する保育の目標の有無についても聞いたところ、86%の施設で立案しており、病棟全体としての目標を掲げながら、個人にも配慮している点が理解される。

具体的な保育目標とその内容は表8に示す。

平均では2.6項目の目標を掲げており、入院中の生活に関する事項はほとんどの施設が目標に掲げている。また、その内容は多岐にわたっている。

更に、病児を対象にしている点をふまえ、安静度による保育の具体的な内容についても検討し、表9にその結果を示した。

表3 保有する保育用品

保育用品の内訳		施設数 (%)
教材	0~20種類	13 (15.1)
	21~40種類	62 (72.1)
	41~60種類	7 ( 8.1)
	61~80種類	0 ( 0)
	81~100種類	4 ( 4.7)
	100種類以上	0 ( 0)
遊具・玩具	0~20種類	46 (52.9)
	21~40種類	37 (42.5)
	41~60種類	3 ( 3.4)
	61~80種類	1 ( 1.1)
	81~100種類	0 ( 0)
蔵書	50冊以下	14 (18.7)
	51~100冊	13 (17.3)
	101~150冊	5 ( 6.7)
	151~200冊	12 (16.0)
	201~250冊	3 ( 4.0)
	251~300冊	6 ( 8.0)
	300冊以上	22 (29.3)

表4 装飾の交換頻度

交換頻度	施設数 (%)
毎月	39 (45.3)
季節毎	30 (34.9)
適宜	25 (29.1)
その他(具体的に)	4 ( 4.7)

表5 行事の種類

行事の種類		施設数 (%)
月例行事	お誕生会	32 (59.3)
	映写会・ビデオ会	13 (24.1)
	人形劇	5 ( 9.3)
	その他	16 (29.6)
年間行事	クリスマス会	81 (95.3)
	七夕	79 (92.9)
	ひなまつり	72 (84.7)
	節分	65 (76.5)
	子どもの日	56 (65.9)
	お月見	32 (37.6)
	夏祭(盆踊りを含む)	30 (35.3)
	お花見	29 (34.1)
	花火大会	27 (31.8)
	正月行事	22 (25.9)
	母の日	22 (25.9)
	運動会	17 (20.0)
	ハロウィン	6 ( 7.1)
父の日	4 ( 4.7)	
その他	35 (41.2)	

表6 行事への参加状況

	常に参加	行事によって参加	参加しない
	F (%)	F (%)	F (%)
スタッフ	37 (43.5)	46 (54.1)	2 ( 2.4)
病棟スタッフ	1 ( 2.4)	32 (76.2)	9 (21.4)
ボランティア	23 (27.1)	51 (60.0)	11 (12.9)
家族			

表7 保育目標

目標	施設数 (%)
1日の目標がある	14 (23.7)
週間目標がある	11 (18.6)
月間目標がある	17 (28.8)
年間目標がある	32 (54.2)
いずれでもない	8 (13.6)

表: 8 保育目標の分類と保育の内容

(%) MA

目 標	F (%)	内 容 例
入院中の生活に関する事項	6 7 (88.2)	季節に応じた行事・活動を行う 屋内・プレイルームの装飾をする 遊ぶ時間を大切にする
児の精神面に関する事項	2 6 (34.2)	子どもの訴えを出来るだけ早くとらえる 子どもと十分な関わりをもつ
生活習慣に関する事項	2 5 (32.9)	規則正しい生活を習慣づける 身近生活の自立を援助する
児の心身の発達に関する事項	1 7 (11.7)	病状をみながら遊びに誘う 発達・興味にあわせて関わる
退院後の適応に関する事項	1 9 (25.0)	社会復帰を目指して関わりをもつ 学習指導を行う
家族支援に関する事項	1 9 (25.0)	母親に子どもの様子を伝える 相談相手になる
児の行動・性格に関する事項	1 4 (18.4)	他児との関わりを通して思いやりを育てる 自主性や自己主張を大切にする
計	7 6	

表 9 保育の内容

順位	乳児	幼児	学童	
ベ ッ ト 上 安 静	1 あやす	絵本や紙芝居	ゲーム類	
	2 抱 く	あやす	パズル	
	3 歌をうたう	折り紙	勉 強	
	4 手遊び	絵をかく	読 書	
	5 おもちゃで遊ぶ	抱 く	ぬり絵	
室 内 安 静	1 抱 く	絵本や紙芝居	ゲーム類	
	2 あやす	折り紙	勉 強	
	3 歌をうたう * 転がり遊び ビージャボード	抱 く	ブロック パズル 積木	パズル
	4 手遊び	あやす	* ゲーム 紙工作	読 書
	5 おもちゃで遊ぶ	*歌をうたう	粘土	*紙工作
通 常	1 抱 く	絵本や紙芝居	ゲーム類	
	2 あやす	抱 く	散歩 ふざけっこ	*散 歩
	3 歌をうたう * 散歩 日光浴 歩行練習	折り紙	ボール遊び ごっこ遊び わらべ遊び	パズル
	4 おもちゃで遊ぶ	あやす	* わらべ遊び 水遊び リズム遊び	勉 強
	5 *散歩に行く	歌をうたう	乗り物 プランコ フルーツバスケット	紙工作

\*安静度の違いにより新たに加わる活動

主な内容では年齢による違いが認められると共に、安静度が低くなるほど活動の内容は豊かに、しかも動的な活動が多くなっていくことが理解できる。

次いで、どのような形態で保育を行っているかを、遊びとの関係でみたものが表10である。

表10 子どもの遊びの形態

主となるかかわり	施設数(%)
子どもが主体的に遊べるように配慮	64 (71.1)
保母職がリードし、子どもは受け身	26 (28.9)
その他	16 (7.8)

子どもの主体的な活動を保障しながら保育を展開している施設の多いことが理解できる。

更に、保育の記録について検討したところ、73%の施設が記録をおこなっていた。その方法を表11に示す。

表11 記録方法

方法	施設数(%)
カードックスに必要事項を記録	7 (10.8)
特記すべき項目のみ看護日誌に記録	8 (12.3)
特記すべき項目のみ保育日誌に記録	34 (52.3)
一日の流れを保育日誌に記録	24 (36.9)
POS方式によって、一緒に記録	7 (10.8)
その他	11 (16.9)

記録の方法としては保育日誌が多く、内容は必要事項ないし特記事項の場合が多い。但し、他のスタッフと記録の共有が計られていない現状がうかがえる。

また、保育の評価については、88.9%の施設で行われているものの、保母職のみで行っている場合が58%であり、他のスタッフの関与は少ない。

評価の実際は表12に示すとうりである。

表12 保育目標の評価

評価方法	施設数(%)
定期的に行っている	26 (44.8)
適宜行っている	24 (41.4)
特に行っていない	14 (24.1)
その他	7 (12.1)

いずれかの方法で行っていることが理解される。

一方、保育は家族との相互支援関係が大切であることから、家族との関わりについても検討した。その結果が表13である。

病状以外のことで関わる(83.8%)といった保育者の姿勢をうかがい知ることができる。

表13 家族との関わり

かかわり方	施設数(%)
家族には、接触しない	1 (1.0)
病状以外については相談にのる	61 (58.1)
病状以外について積極的に相談・助言	27 (25.7)
病状を含めて、積極的に相談・助言	8 (7.6)
その他	8 (7.6)

#### 4) 病棟保母の業務内容

病棟内保母は看護とは切り放せない立場にあることは否めない。そこで、看護面も考慮しながら現状における保母の職務内容について、ともに子どもに関わる看護婦との比較で示したものが表14である。

表14 保母と看護婦の業務分担 (%)

	保母のみ担当	共に担当	看護婦のみ担当
食事介助	5.1	57.5	37.4
排泄介助	2.7	70.2	27.1
掃拭	1.8	43.5	54.6
淋浴・入浴	2.7	40.1	57.2
着脱	2.2	60.8	37.1
歯磨き・洗面	11.1	78.4	10.5
環境設備	27.5	53.1	15.4
測定介助	0.7	21.1	78.2
検査介助	0.8	28.2	71.0
与薬・教育塾布	0.7	25.8	73.5
その他	3.1	24.1	72.8

看護婦の担当業務が多い傾向はあるものの、ともに担当するものに生活の介助といった側面があげられる。また、環境整備に関しては保母のみが担当している割合が他の業務に比べて高い。

更に、チーム医療における保母職の確立をめざすといった視点から、申し送りやカンファレンスへの参加状況を示したものが表15である。

他のスタッフとの情報交換の場への保母の参加は多いと言える。これらは、保母をチームの一員として位置づけていると共に、保母も看護業務を分担しているといった現状を反映した結果と言えよう。

表15 職種間の連携

内容	有		無	
	施設数	%	施設数	%
申し送り	56	73.7	20	26.3
カレファレンス	74	83.1	15	16.9

#### 4. 考察

前報においては(窪田 1994), 保母の必要性は認識するが実現は困難であるという回答内容が多数認められた。一方保母を導入している施設ではかなり長期にわたり保母導入を継続している施設も認められ、その効果の有効性が評価されている。このことは保母が入院児のQOLの向上に貢献していることを実証した藤本らの研究結果からも明らかにされてきている(藤本 1990)。各施設における積極的な保母の導入にむけて、それを阻害する要因の解決をはかる必要性が示唆された経過をふまえ、以下、調査結果のいくつかについて考察を行いたい。

##### 1) 病棟の保育環境について

保育教材に比べ、遊具はやや少ない傾向がみられるが、遊具には個人的な指向が強く、個人で入院時に持ち込むこともある点を考えれば、施設としては教材ほどに保有する必要性がないとも考えられる。また、病棟内の活動の充実からしても保育教材に重点が置かれることは必然であろう。しかし、いずれも入院児の病状や年齢などの多様さに合わせて、種々のものを用意していることはうかがえる。一方、図書類についても所蔵数は多く、この点からも子どものニーズに合わせた対応を心がけている様子が推察される。

また、病棟内の装飾については、その有無、交換頻度等から保育者の入院児に対する精神的な側面への配慮がうかがえる。入院は病気の治療が目的ではあるものの、病棟を生活の場として位置づければ雰囲気作りは情緒的な安定感を高めるものと期待される。変化の乏しい無機質な入院生活の中で心をなごませ、季節感を味わうことや新しい刺激に触れることは精神生活を豊かにするうえで大切であると考えられる。

更に、行事の実施状況を見ると、94.9%の施設で実施され、月例行事・年間行事共に計画し実施している様子がうかがえる。単調に成り易い生活の中で、節目をとらえた生活は潤いを与える役割を担っているとも言える。

入院時であっても、生活を楽しむためのプラスの経験は子どもにとって必要不可欠のことであろう。

入院は子どもにとって、日常生活や親を始めとする親しい人たちから隔離された危機的な状況と言え、このことの理解を十分はかり、できるだけ精神的に安定した状態を維持できるように配慮することが大切である。病気の治療が本来的な目的である点は当然ながら、心の安定と育ちへの配慮もまた考えていく必要がある。子どもにとって環境は成長・発達の重要なファクターであり、経験もまた同様の意義を持つものである。病状を考慮しながら、できる限り豊かな環境を設定し経験をさせることが発達保障という視点からは大切であると考えられる。そこに保母の必要性が示唆され、保母導入の意義も認められる。

##### 2) 保育の実際

病棟内保育の実践にあたって多くの施設では、目的を掲げ組織的に保育を展開している様子が理解できる。更に、必要な場合には個別的な配慮も行うといった、きめ細かな保育の実態がうかがえる。小児病棟とはいっても対象の年齢に幅がある点や保育期間が流動的であること、また、病状により配慮する内容が異なるなど、内容が多岐にわたる必然性もあろう。そこに子どもの生活の充実や精神的な安定をめざすと言った目標と共に、病状を配慮した内容が求められるといった病棟内保育ならではの特徴があげられる。これらを考慮して広義な意味での環境を整え対象児の特徴をふまえた保育が実践されているものと推察される。併せて、安静度による内容の違いや保母がリードして遊びに誘うことが多い実状はあるものの、さまざまな制約を受けている子どもたちでも、遊びという自発的な活動を、できる限り保障していこうとする保育者の姿勢がうかがい知ることができる。

更に、記録や評価からも、保育の充実をはかろうとしている保育者の真摯な姿勢がうかがえる。保育の必要性や意義が病棟内スタッフの間で共有できるようになることが、看護・保育の一層の充実を計ると考えられ、この点への理解を期待したい。

一方、家族との関わりにおいては、保母としての職域をふまえた関わりをとっている場合が多いといえよう。常に子どもと共にいる保育者は、家族にとっては医療スタッフとは異なる意味で信頼でき、安心できる存在なのではないだろうか。入院という事態は子どもが不安にな

ることはいうまでもないが、家族にとっても不安なことである。保母は両者を支える役割を担っているのである。更に、保母は医療現場と家族とのパイプ役としての機能も果たしている。家族が安心することがひいては子どもも安定させ前向きに治療に取り組む姿勢を誘発するものと期待できる。そのためにも家族・スタッフ間の協力・支援関係を円滑する保母の存在は大である。

### 3) 業務内容

保母と看護婦との日常業務における分担は表19にも示されるように、共同で行われている内容が多く、どちらかと言えば看護業務に属すると思われる内容まで保母が分担している場合も見られる。こうした判断は、病棟を管理する医師や看護婦長の意識によるものと考えられるが、あまりそれらの内容を際立たせてしまうことは、チーム医療を実施する上ではかえってマイナスの面を出す可能性もないとはいえないであろう。しかし、理想的な視点でとらえるならば、保母と入院児との接触が、できるだけ医療を離れた保育的な方向にむかうことがのぞましいことである。保母は子どもに対して痛いことはしない、嫌がることはしない、遊びや世話をとうして精神的なゆとりを与え、相談相手となるなど、常に子どもにとって安心して頼れる職員としての立場にあることが本来的な役割ということであろう。こうした点について先見性を持って実施している病院も認めることができたがそれがすべての病院で実現される時期は、日本の医療に大きな変化が起る時期であろうと、現在の実態の中からは予測せざるを得ないのが現状と言えよう。

### 5. おわりに

小児科病棟に勤務する保母の業務内容を知るために、既に第1報で把握し得た保母を導入している病院及びその病院に勤務する保母に対して調査を行い、その結果を分析し検討を行った。

その結果、病棟内保育の現状からは多くの病棟で子どもの生活や心の安定を目ざし、組織的に保育を展開している様子が理解できた。入院児のQOLを考えると、環境の果たす役割は大きく、物と人の両面からのケアが求められている。調査対象とした病院の現状では物と

しての環境はある程度充足されているものの、人については不十分と言わざるを得ない。物を有効活用し、適切な環境を作り出す人の充足が早急に求められていると言えよう。そのためには、保母の導入が切望される。保母の導入の必要性は前報においても触れたが、現実的には導入を阻む諸事情の検討を積極的に行っていくことが導入を推進する一方法であると考えられる。他方、実現を促進するためにはチーム医療における各職種の明確化、専門性の確立も欠かせない視点となろう。チーム参加の現状からは、積極的な取り組みがなされている様子はいかがであるが、より多くの施設で保育の効果とチーム医療における保母の職制の確立がはかられ、できるだけ早期に保母の導入が実現されることを願いたい。

医療には、からだとこころの両面へのアプローチが必要であることは言うまでもない。主体である子どもを生活者としてとらえたときに、その活動を励まし、見守り、共感する立場の人の存在は医療機関においても重要な役割を担っていると言えるのではないだろうか。

このような視点のもとに、今後は個々の保育者の活動例を通じて保母導入による効果について、臨床面の考察を含めて検討して行きたい。

### 謝 辞

本研究の実施に当っては共同研究者として東京都立母子保健院・帆足英一、東京慈恵会医科大学・呉太善、東京都小児科医会・牛山充、淑徳短期大学・帆足暁子、東京家政大学大学院博士課程・北川公美子の諸氏等の協力を得た。また、慈恵医大青砥病院および同柏病院の保母さん達の協力を得たことを深く感謝する。

### 6. 文 献

- 帆足英一他：平成5年度厚生省心身障害研究・小児の療養環境のあり方に関する研究 厚生省平成5年度研究報告書  
 帆足英一他：病棟内保母職の実態と効用に関する研究 厚生省平成6年度研究報告書  
 窪田英夫他：病院小児病棟における保母職の導入に関する研究(1) 東京家政大学研究紀要